

社会で孤立する母親を 支援する資格 「子育てアドバイザー」の現状

幼児虐待や少年犯罪といった事件が後を絶たない。その背景には、社会で孤立する母親の姿がある。その問題に正面から取り組む特定非営利活動法人日本子育てアドバイザー協会理事長の木下敏子氏に、子育てアドバイザーの資格や活動内容をうかがった。

協会設立の経緯

日本子育てアドバイザー協会を設立された経緯をお聞かせください。

木下 設立時には、私を含めて4人のメンバーがかかわっていますが、それぞれ異なる立場にありながら、同じ問題意識を持っていました。例えば、私自身は小児科医として、摂食障害、不登校、チックなどの心理的な問題を家族で解決しようとする家族療法に取り組んできました。しかし、解決までに時間がかかる場合も多く、これらの経験から、治療が必要になる前の段階、つまり子育ての段階で何らかの働きかけができれば、病気にならなったり、問題がこじれる前に解決できるのではないかと考えていました。それで、いつか母親の子育てを支援する活動をしたいと願うようになりました。

現在の子育ては、核家族化が進み祖父母や親族の援助が受けにくい上に、父親も社会的な仕事に忙しく子育てに参加しにくい状況にあります。母親が積極的に外に出て、他の家族などと交流がある人はよいのですが、母親と子どもが部屋の中で1対1で向き合うかたちで育児が行われる、いわゆる壁の中の育児が増えているのが実情です。そのような状況では、母親が子供に教

え損なうと、その部分が欠落した穴ぼこだらけの子育てになってしまっているのですが、そのことに気が付かないまま育ててしまうわけです。この穴ぼこを少しでも埋めれば、心理的な病気を取り巻く状況はだいぶ改善されるのではないかと、そのための活動を何かやりたいと私は考えていたのです。

そのようなとき、ベビーシッター会社を経営する者、幼児教育に携わっている者、児童相談所のカウンセラーの3人が、やはり、家庭の中で「母親はこのままで大丈夫なのか」という私と同じ問題意識を持っていたことから、医療現場の私を含めた4人で、平成11年に子育て支援をする任意団体をつくったのです。

ちょうど母親と子どもの事件が世間を騒がせた時期ですね。

木下 私たちが活動を始めた頃から、幼児虐待や、少年犯罪、子どもの親に対する犯罪と、その逆の、親による子どもへの犯罪などが急に増加したような気がします。私たちも、子育てだけでなく、虐待や犯罪といった面にも視野を広げていかなければという意識も持ち始めました。以前から、このような状況になるのではないかとこのように感じていたのですが、これだけ急に不安が現実のものになってしまうとは思っていません

でした。

母親の孤立という状況は、高度成長期からずっと進行してきているにもかかわらず、なぜ今、急にそのようなことが起きているのでしょうか。

木下 はっきりとした理由は分かりませんが、今の時代というのは、孤立した母親に育てられた子どもが、母親となって子育てを始める、つまり孤立した母親の第2世代にきているように思います。子どもは親の子育てを見て育つことから、この第2世代の母親は、以前にも増して不安が大きいのと同時に、我慢強さがなくなってきています。我慢強くなれない原因は、性格や育てられ方、そして子育ての知識がないということにあります。また、子育ての知恵も親から伝えられていません。

この問題は、特に都市部に顕著なものなのでしょうか。

木下 そうとも限りません。今は地方に行っても、お年寄りとは同居しない生活になっていますし、田舎で敷地が広ければ、別棟を建てて暮らしたりできる状況ですから、日本中、どこにでもある問題だと思います。

まず任意団体を立ち上げて、どのような活動を始められたのですか。

木下 やはり、何より母親を支えることが急務だと考えていましたので、とりあえず母親

チック：顔面・頸(けい)部・肩などの筋が不随意的に急激かつ律動的に収縮を反復する症状。脳や神経の病変によるものがほとんどであり、心因性により症状が悪化する。チック症。



を支える人を育成していくということが主な目的でした。

以前、母親を支えていた世の中のシステム、例えば祖父母や親類との付き合い、地域コミュニティといったものは、今やほとんど崩壊していて、母親は孤立し不安を感じています。そのような母親の悩みを暖かい気持ちで聴いてあげることができ、子育ての知識や問題を解決できる方法を知っていて、相談されることはプライバシーにかかわることなので、秘密を守る人を養成しなければいけないと考えました。したがって、子どものことも分かる、思春期の気持ちも理解し、母親はもちろん父親の気持ちも分かる幅広い知識を持ち、カウンセリングの方法を身に付けた人で、上手に母親の話を聴いてあげられて、その上必要なアドバイスもできる人を養成するプログラムをつくったのです。

それが子育てアドバイザーですね。

木下 その通りです。当初から、「子育てアドバイザー」という資格を設けて、そのための養成講座を始めました。

子育てアドバイザー 養成講座の内容と現在

子育てアドバイザーの定義と、どのよ

うな資質が求められるのかを教えてください。

木下 子育てアドバイザーとは、「妊娠中から思春期まで、子育てに不安な親を支え、必要な場合はアドバイスできる人」のことで、大事なのは、子育て中の母親の心を聴いてあげられること。母親の心に添い、共感し、子育ての知恵を伝え、互いに喜び合うことができる人、これが子育てアドバイザーなのです。

求める人の資質には老若男女を問いません。人格(品性、優しさ、大らかさ、愛情、つつましさ、労苦をいとわない、そして臨機応変にものごとを対処できる人)、知識(世の中の現状や情報を捉えることができ、変化に対して受け止める強さ、知識欲の旺盛な人)、経験(子育て経験者、多くの人の話を素直に聴くことができる人)の備わった人であれば、どなたでも歓迎します。

子育てアドバイザーの養成講座がスタートしたのは、いつ頃なのでしょう。

木下 平成11年に任意団体を立ち上げて、1年間いろいろと討議を重ねた結果、まずアドバイザーの養成を行い、そこでアドバイザーが育った時点から、相談事業を開始するという方向で活動を始めました。立ち上げ時に、東京都から補助金が出まして、2年

以内に事業をスタートさせるという条件もあったので、養成講座がスタートしたのは、2年目の平成12年です。さらに2年経った平成14年4月には、任意団体から特定非営利活動法人(NPO)になったのです。したがって、子育てアドバイザーは、こちらのNPO認定の資格ということになります。

スタート時、養成講座の受講者数は、

木下 約40人ほどです。ほんの小さな記事で新聞に取り上げられたただけだったのですが、定員の3倍もの応募がありました。そこで初回は、やむなく48名で締め切り、残りの希望者は次回まで待っていただきました。

地域の子育て支援ということで、参加者の多くは主婦の方々、その他に専門の保育士さんや、看護師さん、幼稚園の先生などが参加していました。

この養成講座を受講する方々の受講動機は、

木下 まず、受講生の多くを占める主婦の場合は、自分の子育て経験を社会のために活かしたいという気持ちから受講する人が多いようです。最近では定年間近の方が、定年後に自分の経験を活かして活動するきっかけとして受講するというパターンもありますし、保育士さんの場合には、子どもが好きで保育士になったのに、いざ働いてみ

ると母親からの相談が非常に多いという現実
に直面し、受講したと
いうこともありました。

最初の48名が
受けられた講義内容、カリキュラムは、現在
と同じものなのでしょう。

木下 基本的には変わっていませんが、より時代のニーズに応えられるように配慮しており、最近では虐待の講座もあります。講座は初級、中級、上級とレベルが上がっていくごとに専門性を増していきます。子どもの発育過程の基礎知識から、本題である母親の心理に至るまで講義が進み、最後に認定テストを行います。最初の48名のうち、認定テストに受かったのは24名でした。

認定テストに落ちてしまった場合は、
木下 そのような方のために、救いの道はいろいろあります。例えば、追試をしたり、補講を行ったりします。大事なことは、落ちたからダメというのではなく、どこが悪くて落ちたのかを理解して、その部分を見直すことで、より素晴らしいアドバイザーになってもらうことです。試験でダメだった部分を補講や

資料 子育てアドバイザー養成講座のカリキュラム

初級・中級・上級(全6回 講義+演習 各2時間)

初級	
第1回	アドバイザーの使命と役割
第2回	母体・胎児・乳幼児期
第3回	学童期
第4回	話を聴くということ
第5回	母子関係論
第6回	思春期
中級	
第1回	発達障害思春期の母親の心理
第2回	思春期の問題行動と対処法
第3回	思春期母親の心理
第4回	乳幼児期の母親の心理
第5回	乳幼児虐待
第6回	アドバイザー現場から
上級	
第1回	実技・演習 《母親への面談の仕方1対1の面談》
第2回	実技・演習 《祖父母・親族同席の面談》
第3回	実技・演習 《相談現場のワークショップ》
第4回	実技・演習 《父親の面談の仕方》
第5回	実技・演習 《面談の実際》
第6回	認定テスト・終了式

出所：特定非営利活動法人日本子育てアドバイザー協会ホームページ
(<http://www.kosodate.gr.jp/index-top.html>)

追試で確かなものとしたことが役に立ち、アドバイザーとして社会に出たときに、感謝されることも多いのです。そのようなきめ細かい講座を心掛けています。

養成講座の主な内容とボリュームは、
木下 年に3回、1月期、4月期、9月期と講座参加者を募集し、順調に初級、中級、上級とステップアップすれば、ほぼ1年かけて資格認定を受けることができるシステムです。各課程すべて、隔週土曜日に1回2時間、3カ月間で12時間の講義を行い、トータル36時間で上級まで終了します。その後、認定テストに合格すれば、子育てアドバイザーの資格が得られるわけです。受講料は初級が2万3,000円、中級が2万4,000円、上級はテスト代を含めて3万7,000円となっています。

主な講義内容は、初級は妊娠から思春期までの子どもの発達、そして母子関係論が中心で、中級はアドバイザーの現場や母親の心理が中心になります。上級になると、ロールプレイングによる実技・演習が中心となります。最後に先ほども申しましたが、認定テストが行われます(資料参照)。

現在11期生の講義が始まっており、これまで延べ2,500名の受講者を数えるまでに
なりました。

土曜日だけの講義であれば、仕事を持つ人や男性でも受講できますね。

木下 父親の方や男性の方の参加は大歓迎です。特に、母親にとって父親の役割は大きいですから、男性の方にはぜひ受講して資格を取っていただきたいと思います。

取得後、どのように資格を活かしていけばよいのでしょうか。

木下 資格を取得すると、地域の保育所や学校での相談・講演活動、企業や官公庁とタイアップしての子育て支援事業、さらに企業内での事業など、さまざまな場面で資格が活かされます。ボランティアの場合もありますし、有料で派遣されるときもあります。また、さら

に勉強したいという方のために、スーパーバイザー養成講座やブラッシュアップ講座を用意しています。スーパーバイザーになれば、アドバイザーに適切なアドバイスをしてあげることが可能になり、活躍する場が広がります。

ニーズのあるところは、まずはじめにこちらの協会にアクセスしてくるのですか。

木下 アドバイザーの中には、個人的に活動の場を切り拓いている人もいます。しかし、ほとんどの場合はまず私どもの協会に連絡が来て、それに応じて、こちらでは一番適任の方を派遣するようにしています。そうすることで、何かあったとしても、アドバイザーと協会が協力しながらフォローしていくことができるからです。したがって、自治体なり企業なりで何か新しいことを始めようとしたときには、第一報がこちらに入ってきます。ですから、準備段階から一緒にかかわっていくことになります。

子育てアドバイザーの活動

最近、教育の重要性がとみにクローズアップされてきていますが、その基盤となるべき子育てはさらに重要です。子育てアドバイザーの役割も、これからさらに重要になっていくのでは。

木下 そうですね。アドバイスしてあげるときに最も重要なことは、母親にこれから先何が起こるかを知らせてあげることです。先ほど母親の我慢強さがなくなってきたと言いましたが、これも先が見えると我慢できることも多いのです。例えば、子どもに何かをやらせようとすると、時間がかかりますし、服や部屋が汚れてしまうこともあります。母親はそれを我慢できずに、自分でやってしまいがちです。しかし、「あと数回やれば子ども自身でちゃんとできる」と、先が見えていれば、自分でやってしまいたくなる気持ちを抑えて子どもにやらせることができるので

す。このように母親へのきめ細かな教育が大事なのです。母親が見守ってくれることで、子どもは自分でできることが増えていき、母親にとっては負担が軽くなるということであれば、一番よいわけです。このようなことを母親に気付かせてあげるのが、子育てアドバイザーの役割なのです。この役割は日本の将来のためにも重要であるはずですが、

外国には、このようなアドバイザー制度はあるのでしょうか。

木下 全く同じようなものがあるかどうかは分かりませんが、恐らくシステムとしてはあると思います。ただ、欧米のカウンセラーと日本のカウンセラーの一番の違いは、日本のカウンセラーは自分自身のカウンセリングを受けていない点です。ですから自分を知らない。これは非常に危険なことです。子育てアドバイザーの場合、スーパーバイズシステムがあり、そこでアドバイザーは自分の資質やレベルを客観的に見ることができます。そして、それが相手を支える力のベースになります。

外国の子育てということでは、最近、イギリスの子育てシステムが変わって非常によくなっていると聞きました。少年犯罪も減ってきているようで、ぜひその辺を学びたいと思ひまして、今年9月にイギリスに視察に行ってくる予定です。この視察が少しでも今の日本の少年犯罪を減らす参考になればと考えています。

養成事業の他に、もう一つの相談事業はどのように展開されているのですか。

木下 いくつか活動の場所があります。一つは大手スーパーの中の赤ちゃん休憩室を使ったアドバイザー活動です。休憩室にアドバイザーが週に1日居て、そこで子育ての悩みなどの話を聴き、母親に満足して帰っていただくような活動をしています。話をして確認できるというのは、母親にとってはとても大きなことですし、スーパーやデパートな

どでは母親と父親が一緒に来ることが多いので、両親に話ができる、とても貴重な場でもあるわけです。

その他、この協会内にもカウンセリングルームを設けており、そこで専門の講師陣がカウンセラーとなって相談を受けています。こちらでの相談は、事前に予約を入れていただくことになっています。

カウンセラーに資格取得者を起用することもあるのですか。

木下 将来的にはぜひそのようにしていきたいと考えておりますが、今現在は、こちらのカウンセリングは講師陣で行っています。

今後の活動方針をお聞かせください。

木下 まずは全国展開をしていきたいと思ひます。その前段階として、よい講師がたくさん出てほしいですし、どのようなところと手を組んでいくかという問題もあります。そのあたりを考えながら進めていきたいですが、すぐに実現できることではないので、徐々に展開を図りたいと考えています。講座を増やし、活動の場を増やして、それをネットワーク化することも必要となるでしょう。

同時に、子育てアドバイザーというのはいかなる資格で、どういう仕事なのかが目に見えて分かるような場があればよいと思ひます。もっと多くの人に知っていただくためには、子育て雑誌などに取り上げていただくいたり、監修者としてかかわっていくというような広報活動も大事になってきます。

また、活動資金を募るには、より多くの企業などに賛助会員となっていただければと思ひます。

どのような企業が賛助会員になることができるのですか。

木下 私たちの活動に賛同していただけることはもちろんですが、企業にとっても私たちが支援することで営業活動や企業のイメージアップに間接的に役に立てればと思ひています。そのような企業に積極的に会員

になっていただきたいと願っています。現在は、ミレクをつくっている会社と印刷会社など3社に賛助会員になっていただいておりますが、今後はこの数を20社以上に増やしたいと考えています。1口50万円で、企業イメージが上がるのであれば、決して高くない宣伝費だと思います。

NPOとして非営利の活動ですが、こうした活動の成果や喜び、やり甲斐を一番感じるの、どのようなときですか。

木下 最終的には、心身ともに健康な子ども達がたくさん育ってくれるということに尽きます。そうすれば社会の犯罪が減っていく、それを望んでいます。しかし、その成果は10年先、20年先のことになるでしょう。もっと身近なところでは、母親がここで相談に乗ってもらったことでホッとしたとか、インターネットの掲示板に「相談してよかった」などの母親からのよい反応が書き込まれていると、それはとても嬉しいです。そうして安定した気持ちで育児ができれば子ども達もきっとよい子に育ち、ひいては日本の未来を明るいものにしていくと信じています。そうしてNPO法人日本子育てアドバイザー協会の活動をより多くの方に知っていただき、社会全体で子育てを考える動きの一助となることを願っています。

特定非営利活動法人日本子育てアドバイザー協会理事長

木下 敏子(きのした としこ)

1963年千葉大学医学部卒業。1967年佼成病院小児科勤務。1971年～1978年千葉大学医学部精神科にて児童心理学を学ぶ。1980年佼成病院小児科部長・佼成病院小児科心理室長。1985年～1988年国谷誠朗博士の下で交流分析・家族療法を学ぶ。1988年～1990年鈴木浩二博士の下で家族療法の臨床研究を行う。1989年～1999年千葉大学医学部非常勤講師。1990年～1991年日本心理カウンセリングセンターにて心身症の治療催眠を研修。1999年1月佼成病院定年退職。1999年～2004年3月日本心身医学会指導医として勤務。1999年6月高柳病院院長(現在)。2002年9月日本子育てアドバイザー協会理事長(現職)。主な著書に『家族に学ぶ家族療法』(分担執筆/金剛出版・1991)、健康絵本三部作『ぜんそくなんかぶきとばせ』、『おねしよまじんをやっつける』、『はっぴょうかいなんかこわくない』(監修/佼成出版社・1993)、『思春期異常』(共著/新星出版社・1993)などがある。